

着物という視点から七五三を捉え直す

田口祐子

はじめに

現在七五三では、写真撮影のサービスを利用して記念撮影を行なう人が多くなっている。七五三でこのようなサービスを利用する人が多くなつた理由としては、一九九二年以降に登場したこども写真館⁽¹⁾の存在が挙げられる。子ども の写真撮影に特化したこの種類の写真館では、写真撮影だけでなく、衣裳のレンタルや着付け、美容も写真撮影に付 随する形でサービス提供されることが多い。また写真をその場で確認し、必要なものだけを購入できたり、ショッピングモールなど便利な立地であつたりすることがみられる。こども写真館が登場した後、七五三を祝う中で「写真撮 影をする」ということが親たちの意識の中で大きな部分を占めるようになつたといえる。

ところで七五三といえば、現在祝い着として着物を着た子どもの姿を思い浮かべやすいが、七五三における写真の位置付けが大きくなつてきてているように、七五三と着物の関係にもこれまで変化はあつたのだろうか。またあるとし たら、どのような変化がみられたのだろうか。

筆者は自身の七五三、自分の子どもの七五三、孫の七五三といった三つの時期における七五三の祝いを経験した一

九四〇年～五〇年代生まれの人たちを中心に、その際の祝い方や感じた意義について聞くインタビュー調査を継続して実施しているが、その結果戦後から現在にいたるまで七五三を考える際の重要な要素として、「写真」「神社」「着物」「お祝い」⁽³⁾といった四つのキーワードを取り出すことができた。

対象者の話からは、戦後すぐ存在があまり大きくなかった「写真」が家庭のカメラの普及、こども写真館の登場で、主要な撮影場所である「神社」とつながりながら七五三の中心的存在となってきた様子を確認することができた。一方「着物」は戦後から現在に至るまで、着物だけのエピソードが多く、他の要素とつながらずとも七五三における重要な位置を占めてきた。エピソードが多い理由として、対象者が子どもの頃は自身を含め周囲でも着物を着る人がおり、着物についての知識や経験をもつていたことが挙げられる。

調査において「着物」が重要な位置を占めてきたという結果は、これまで七五三において着物に大きな動きがなかつたことを意味しているわけではないだろう。現在急激に重要度が増している写真のように、七五三という祝いの中で着物についても位置づけや意義の変化があると考えられる。しかし、着物は七五三の重要な要素でありながら、その位置づけや意義について論じた研究は少なく、変遷を知ることは難しい。

そこで本論は、これまで整理されてこなかった七五三と着物の関係について情報収集、整理し、着物という視点から七五三を捉え直す試論とした。

一、七五三登場前の幼児期から児童期にかけての儀礼の様子と着物の位置づけ

現在多くの冠婚葬祭に関する手引き書が出版されているが、七五三についてみると「赤ちゃんから子どもに成長していく節目にあたる年に、晴れ着を着せて、氏神様をまつる神社に詣でる行事です。子どものこれまでの無事を感謝

し、今後のすこやかな成長を祈ります⁽⁴⁾」などと記述されている。この中の晴れ着の部分については、着物をイメージする人が多いのではないだろうか。現在の七五三に関するこの記述は、江戸時代に江戸の町でみられた子どもの儀礼と酷似している。例えば、江戸末期の江戸の様子を知らせる『東都歳事記』(天保九(一八三八年)の一月一日の項をみると次のようにある(朝倉治彦校注『東都歳事記3』平凡社、一九七二年、六六頁から引用))。

嬰兒官參^(ミヤマカリ) 髮置^(カミオキ) (三歳男女) 褒着^(ハカマヤキ) (五歳男子) 帯解^(オヒドキ) (七歳女子) 等の祝ひなり 當月始の頃より下旬迄。但し、十五日を専らとす。尊卑により、分限に應じて、各あらたに衣服をとゝのへ、産土神へ詣し、親戚の家々を廻り、その夜親類知己をむかへて宴を設く。

この記述では各儀礼の後にそれぞれ年齢と性別の注記がついているが、別の文献では「髪置褒着帯解」とひとまとめにした書き方もみられる。ここで記述されている儀礼の様子は、先の手引き書にみられる現在の七五三の祝いの形とほぼ同じといえる。⁽⁵⁾

平安時代以降の文献で確認すると、公家や武家の間で幼児期から児童期にかけて行なわれていた髪置・褒着・帯解はそれぞれ内容を異にする儀礼であったものの、この江戸時代末期の様子を伝える記述にその違いはほとんど反映されていない。当時の人々はそれも承知の上で髪置・褒着・帯解という儀礼の名を冠したことが推測できる。つまり、儀礼の形や内容ではなく、そこに込められた思いに共通した意義を感じたということだろう。

では「そこに込められた思い」とは何であろうか。髪置・褒着・帯解がかつてそれぞれどのような儀礼だったのかを確認することとする。

まず髪置についてみていただきたい。褒着と帯解は着物と関連が深い儀礼であるのに対し、髪置は幼児の髪型と関連が深い。髪置の呼称は、幼い男女児がそれまで剃っていた髪を、この儀礼を境に伸ばし始めることに起因すると考えられ、着物とは直接関係がない。公家や武家に関する文献の中にもみられる「髪置」に関する現在確認できる最も早い史

料は、『勘仲記』の中の弘安六年（一二二八）藤原兼平が子基忠三歳の祝いを行なつたことに関するものである。その後の史料の中で「綿帽子」「白髪」など頭に白いものをかぶせる記述が多く、年老いた姿をさせてることで、儀礼を通じて子どもの長寿を祝うといった意味合いがうかがえる。

袴着は元々男女のいずれでも、袴の履きはじめの時期に行なわれていた儀礼である。平安時代の貴族社会における史料で多くみられる。袴着に関する史料では、儀礼の参加者が誰であつたか、袴の紐を結ぶ腰結び役は誰であつたかに関する記録が多い。子どもの成長過程に即した産育儀礼であるものの、背景に大人たちの政治的・社会的動きがあり、一門の繁栄・権威付けの意味合いが強くあつたことが読み取れる。髪置や帯解に比べて祝う年齢や祝う時期に幅のあることに特徴があり、大人社会の事情に左右されていたことがうかがえる。

帯解は、主に女兒に対し行なわれるツケヒモを取つて帯を締める、成長に伴う衣服の形態の変化に関連した儀礼である。帯解は髪置や袴着と異なり平安時代の史料にはみられない。帯解の儀礼が成立するためには、帯の使用の普及が必要であり、現在の着物の形でもある小袖が公家階級において男女ともに着用されるようになつたのは、帯の重要度が増す室町時代以降だからと考えられる。⁽⁶⁾ 本儀礼の呼称は、帯直、紐おとし、紐解など時代を経るに従い変化し、江戸時代後期になつて帯解の呼称が多くみられるようになる。

各儀礼の内容は異なるが、その意義として子どもの無事な成長を祝うことについては通底している。図表1にみられるように、祝う年齢にはばらつきがある。祝われるのは子どもながら、大人の都合に合わせて祝いが実施された様子がうかがわれ、袴着の場合にみられるように子どもの成長を通じてイエの繁栄・存続を意識した意義が感じ取れる。民俗学の報告では、庶民の間で髪置、袴着、帯解のそれぞれに符合するような形で、カミオキ、ハカマギ、オビトキといつた呼称がみられる。儀礼の扱いや残存の仕方から、高い年齢の祝いをより重視する様子がみられる。全国各地に残る産育習俗を集めた『日本産育習俗資料集成』などをみると、着物に関連した儀礼としてオビトキ（ヒモトキ）・

ハカマギが全国的にみられる中、カミオキという呼称は各地に残っていても、その祝いの内容は髪型ではなく着物に関するものに変化していることが多い。竹内利美はこのように呼称が残るだけの状態を「髪置祝いの空白化」と表現した。竹内は、庶民層にみられるこの傾向を、儀礼の合体化・簡略化⁽³⁾が進んだ結果ではないかと説明している。

また、明治大正期の東京全域における生活記録作成を目的に実施された、東京都教育委員会の「昭和三九年・四〇年度緊急民俗文化財分布調査」の結果を示した『東京の民俗』でも、このことを確認できる。⁽⁹⁾全調査報告の中から、七五三とそれに類する記述を集めたところ最も多かった呼称は、オビトキであり、次いで七五三であつた。カミオキ、ハカマギについては、古くは行なつていたようだとする記述はあるものの、明治大正期に行なつていたのは千代田区神田の一地域のみとなつてている。

図表1 髮置・袴着・帯直（帯解）における年齢と性別一覧（数値は史料数）

	髪置			袴着			帯直		
	男児	女児	指定無	男児	女児	指定無	男児	女児	指定無
1歳	2	0	0	0	0	0	0	0	0
2歳	9	4	1	1	0	1	0	0	0
3歳	8	0	0	9	0	1	0	0	0
4歳	0	1	0	1	0	0	0	0	0
5歳	1	0	0	8	0	0	0	0	0
6歳	0	0	0	8	0	0	0	0	0
7歳	0	0	0	0	0	0	0	1	0
8歳	0	0	0	3	0	0	0	1	0
9歳	0	0	0	1	1	0	8	4	1

（『古事類苑』「礼式部」の祝いの記録で年齢の記述がある史料に基づいて筆者作成）

東京の場合も竹内が指摘する儀礼の合体化・簡略化が進んだとすると、庶民層で三つの儀礼のうち、特にオビトキが多く残つたのはなぜだろうか。筆者の茨城県における七五三調査から考えてみたい。昭和六〇年～平成七年まで茨城県の特に南部や南西部において、「七五三披露宴⁽¹⁰⁾」とよばれる大がかりな七五三の祝いが盛んに祝われた。昭和四〇年代まで該当する地域では七五三はオビトキとよばれ、長男長女が七歳の時に特に盛んに行なわれたという。七歳の重視は、子が七歳頃の親の年齢等を考えて、イエの代替わりの時期と重ね繁栄を願う意味合いが含まれていたと考えられる。本件の昭和六〇年～平成七年の場合、まだこの地域で残存していた地域共同体のつながりとホテ

ル・宴会場の建設ラッシュの時期が重なり、それらの施設を利用して地域の関係者を大勢呼ぶことができる条件が揃つたことが主要な原因と考えられる。そこには子どもの成長のためだけの祝いではない、イエの祝いという意味づけがなされていたと考えられる。つまり七歳の重視は、古くは高かつた子どもの死亡率が低下したことで、子どもの生存への希求よりも成長への期待の方に人々の関心が向き、低年齢での子どもの祝いよりも成長のイメージの強い七歳トイエの繁栄とが結び付けられたことによるのではないだろうか。

以上から、公家や武家の間で行なわれていた髪置・袴着・帯解、庶民の間で行なわれていたカミオキ・ハカラギ・オビトキといった幼児期から児童期にかけての儀礼は、儀礼の合体化・簡略化が進み、形や内容の変化をみながらもその中核に子どもの成長を祝い、次代を担う子どもの無事な成長を示すことでトイエの繁栄や存続を願うといった意義がみられた。この中で着物は成長・繁栄を示すための重要なシンボルであったといえる。着物の重視は「髪置袴着帯解」から七五三へと引き継がれた重要な部分といえる。

二、明治大正期の七五三と百貨店

第一章で取り上げた、江戸末期に江戸で行なわれていた「髪置袴着帯解」は明治にかけて書物からその呼称がみられなくなり、同じ内容の儀礼が七五三と呼ばれるようになる。

明治大正期の東京で七五三の祝いはどういうに祝われたのだろうか。明治初期から現在にいたるまで継続して発行されている二新聞『読売新聞』『東京朝日新聞』の記事を整理し、実態の把握を試みた。⁽¹⁾ そこから、七五三について明治大正期の東京では、「一月十五日に盛装し氏神参りをする」という儀礼のイメージが共有されていたこと、参拝先が神田明神や日枝神社など数社に集中していたこと、戦争や震災などにより多少の賑わいの程度の変化はあるもの

の、期間を通して、江戸の頃と同様な形で様々な階層の人々により実施されていたことがわかつた。

これら七五三に関する記事を整理すると、明治大正期には二つの目立つタイプの記事群がみられた。明治三三年（一九〇〇）からみられるようになる大手呉服店による七五三祝着の流行に関する記事（以後、七五三流行記事とする）と、同時期に華美な衣裳で祝われる様子を批判する記事（以後、七五三批判記事とする）である。

七五三流行記事は、呉服店の店名を出しながら、主にその年々の七五三祝着の売れ行きや当日参拝時に着用された祝着の流行動向について書かれた記事を筆者が総称したものである。例えば、「本年の流行柄を其の相場の概略を少し許り記して見やうと思ふ三井呉

西暦	和暦	月	日	東京朝日新聞(タイトル)	呉服店名
1900	明治33	11	7	七五三の祝衣(上)	大丸・下村
			8	七五三の祝衣(下)	下村
1901	明治34	10	28	七五三の祝衣(1)	三井
			29	七五三の祝衣(2)	三井・下村
			30	七五三の祝衣(3)	下村
		18	社頭の紅葉(七五三の祝衣) 上 大丸店員の觀察	大丸	
			19	社頭の紅葉(七五三の祝衣) 下 三井店員の觀察	三井
		10	20	七五三の祝ひ(1)	三井・大丸
			21	七五三の祝ひ(2)	三井・大丸
			22	七五三の祝ひ(3)	三井・大丸
			25	秋の新装(上)	下村
1903	明治36	11	9	七五三の祝ひ挿と箱せこ	京橋南伝馬町の白牡丹
			17	三井大丸の祝衣觀察談	三井・大丸
1906	明治39	11	12	七五三祝物の好況	三越・白木・松屋・下村
			13	七五三祝衣の状況	三越
			15	本日の七五三祝ひ	三越
1926	大正15	10	31	七五三のお祝ひ着は何にしませう	松坂屋

・下村 大丸に同じ。

三井 - 1904年デパートメントストア宣言により三越に、白木 - 1967年東急百貨店に。

服店の調によれば▲男子の服装としては其上着の地質を羽二重……」（東京朝日新聞 明治三四年一〇月二八日）のように記事の中に店名を載せて商品を紹介し、来店などを勧めるような形もみられる。どの記事も、直接また間接的に七五三の祝着をはじめとした商品と店の宣伝をする内容となつてている（図表2-1、2-2）。

二紙においてそれまで七五三に關する記事は、全文一〇行にも満

図表 2-2 明治大正期の七五三流行記事一覧(読売新聞)

西暦	和暦	月	日	読売新聞(タイトル)	店名
1910	明治43	10	24	七五三祝衣の陳列会	松屋
1913	大正2	10	26	新意匠とりどり△新年勅題の裾模様△七五三祝着準備	松屋・高島屋
1914	大正3	11	1	七五三に用いる今年の祝着	三越・白木屋
1915	大正4	10	13	七五三の祝着	松坂屋・白木屋
			27	七五三のお祝い物は何になります	白木屋
		11	12	七五三の祝着	三越
		11	3	七五三のお祝着	松坂屋
1919	大正8	11	13	七つの祝姿	高島屋
			7	婚礼衣装と七五三の祝着 白木屋で陳列	白木屋
		10	2	七五三の今年の祝着	松屋
			3	高島屋の奉祝窓飾	高島屋
1920	大正9	11	7	七五三の祝着	松屋
			3	高島屋の奉祝窓飾	高島屋

たない簡単なものであつたが、七五三流行記事の登場によって、一気に華やかで、分量も何倍にも増えるといったような大きな扱いとなる。

このような呉服店の店名を入れた七五三流行記事が明治三十三年に登場後、増え定着していく背景には何があるのだろうか。この時期の大手呉服店の動きに注目してみたい。

神野由紀は「明治末期に日本の呉服店が次々と近代的百貨店へと変貌していく中、子ども用の商品に対する百貨店の関心の強さは注目に値する」としている。⁽¹²⁾当時の西洋における近代的家族觀の発生とともに、子どもへの関心の高まり、子ども本位といった児童觀が芽生える中、いち早くその意味を理解した日本本の百貨店では子どもが重要な消費の市場になり得るとし、この時期積極的に子どもを顧客として取り込む努力をしたとしている。

彼は百貨店の利益を追求するだけでなく、児童文化活動にも力を入れており、それは「児童博覧会」「児童用品研究会」などの形へと展開されていった。これらの三越の活動は、欧米の児童博覧会を参考にして行なわれた日本最初の児童博覧会「こども博覧会」（東京上野、明治三九年）に触発されたものであつた。この博覧会をはじめ、当時は子どもに関する最新の知識を広く集め普及させ、子どもに清新なる娛樂を与えるとする機運が高まっていた。三越をはじめ、この時期全国的に開催された児童に関する博覧会の動きを論じている是澤優子は「児童文化」という概念が一

般民衆に浸透する以前の日本に於いて、啓蒙的な役割の一端を担っていたのではないだろうか」と指摘している。⁽¹³⁾

三越の児童博覧会は明治四二年（一九〇九）の第一回から大正一〇年（一九二一）の第九回まで続いたが、この一連の動きの中で七五三に関する目立った動きとして、大正五年には児童博覧会を発展させた企画、「児童用品展覽会」の中での展示がある。この展覽会の特色は、それまでの展示のように児童用品を陳列するのではなく、子ども時代を七つの場面に分け、それぞれの場面を再現して設営されたスペースに、人形と大小道具を置いてその情景を立体的にあらわした「家庭的エキシビション」（『三越』六卷二号、大正五年）としたことである。出産から小学生までの間を七つの場面に分け、①出産（産湯につかっている場面）、②雛祭り（人形飾り祝い膳）、③幼稚園（先生と園児が談笑している場面）、④七五三詣り（祝い着を着た子どもが母親に手をひかれお参りする場面）、⑤小学校（廊下を歩く子どもと教室）、⑥こども室（和室に置いた机で勉強する児童とその傍で遊ぶ幼児）、⑦運動会（競技風景）としている。この当時の児童の文化的生活を表現する中に、雛祭りと並んで七五三詣りが選ばれていることは興味深い。

この七五三に関する展示内容であるが、七五三でにぎわう浅草觀音の境内をバックに、袴に帽子をかぶつた五歳と思われる男児と振袖を着た七歳と思われる女児が母親を中心にして参拝している親子と、振袖を着て母親と手をつないでいる三歳と思われる女児の親子の人形が設置されている。『三越』の記事には「衣裳の色彩、模様、図案等は當店に於けるエクスパートが苦心をかさねたものでございます」とあり、別の記事でもとりわけ七五三の展示に対する反響が大きく、『時事新報』では着物の柄などについて精細な批評をいただいたとしている。当時の七五三の子どもの生活文化における位置づけと、あるべき姿を汲んだものと考えられると同時に、七五三が児童文化に寄与しながら、大きな利益をもたらすものと考えられていたといえる。

新しい児童觀を背景として行なわれた三越の児童博覧会であつたが、三越の児童用品の購買層は貴族もしく富豪向きで平民的なものはあまりなく、大多数の子どもたちには手の届かない存在であつたとされる。しかし、この動きの

中で児童の健全な育成にもかかわる児童文化の一つとして七五三が取り上げられていたことは注目すべきであり、七五三で着用される着物の商品価値の高さと社会や家庭における子どもへの関心の高まりとが、この動きを後押ししているといえる。

三、七五三批判記事と祝い着の洋装化

文化的側面と商業的側面を併せ持つた児童に関する博覧会の全国的な展開、そして同様の流れで呉服店からの七五三用祝い着の情報が新聞で掲載されるようになつた頃、新聞では過度に豪華な祝い着に対する批判的な記事もみられるようになる（図表3）。

二紙における最も早い七五三に関する批判記事は、『読売新聞』の明治三四年（一九〇二）一一月一四日の「葉がき集」である。この記事は当日の投稿欄に掲載された中のひとつであり、掲載内容は次のようなつてている。

神無月と言つて先月ハ不めでたかつた、従つて今月ハ第一天長節といふ日があるほどで祝い月としても世間でもてはやされる月だ、ついてハいかに子供の七五三の祝ひで衣裳と着飾ることで大分前方経済的大議論があつたが、この際大いに説を戦したいと思ふ、いかに（なにがし）

本記事前に二紙で七五三批判記事はみられないものの、「葉がき集」の文面からすでに何かしらの形で七五三に対する批判がなされていたことを知ることができる。

多い論調として例えば明治期では、「七・八歳の児童に、修飾最も多き服などが増え、市中を歩かせ行くのは、虚栄にはせる軽薄な才子のことなど思ひやられて見にくし」（明治三八年一月一七日 東京朝日）、他に「七五三親の虚栄を子に飾り」「成上り餓鬼を飾つて見せ歩き」（明治四二年一月一六日 東京朝日）という句が掲載されたり、「親の愛は

図表3 明治大正期の七五三批判記事一覧(東京朝日新聞・読売新聞)

西暦	和暦	月	日	東京朝日新聞 (タイトル)	読売新聞 (タイトル)
1901	明治34	11	4		葉がき集
			14	七五三の宮参りに就て	
			15		今日の祝ひ日
1902	昭和35	11	16	七五三の宮詣	
1905	明治38	11	17	子供と家庭	
1909	明治42	11	16	鶏肋集	
1912	大正元	11	16	華やかな七五三▽振袖を着た児の展覧会▽虚栄心の強い岩崎男爵	子供の祝い日△賑やかな昨日の七五三△愛の光で寒い日も和ぐ
1916	大正5	11	5		子供には心の錦 下田歌子
1918	大正7	10	8	金に包まれる=成金連の子供達 豪華な七五三の祝着	
1919	大正8	11	12	七五三の甚だ悪い傾向	
1922	大正11	11	4	鐵筆 七五三	
			12		七五三【コドモノシンブン】
1923	大正12	11	15	さすがに質素 けふの七五三	
1924	大正13	11	9		改善したい一七五三の祝ひかた 晴着の競争をやめ
1925	大正14	11	12		七五三 改善 子供が喜ぶ一新しい企てに
1926	大正15	11	9		七五三祝儀用の履物調べ

時として濁つた虚栄の誇と変る」(大正元年一月一六日 読売)といった文言がみられ、呉服店からは豪華な祝い着に対する流行記事がみられる一方、お金をかけて子どもを過剰に飾り立て、子ども本人よりも家や親の対社会的満足を満たしている様子を批判する記事がみられるようになる。

また大正期では、当時の知識人による七五三に対する意見を述べた記事が散見される。例えば当時のお茶の水女学校の主事を務めた倉橋惣三による「改善したい 七五三の祝ひかた 晴着の競争をやめ 子供本位の祝ひ方に改めたい」(大正二三年一月九日 読売)では、「七五三を祝うことは善い習慣ながら、子どもに分不相応な豪華な着物を着せるのは親本位の祝いとなつてるのであり、「目を反けたいほど非教育的な記事」であるとして、子ども本位の祝い方が必要だと述べている。このような記事がみられるようになった原因としては、第二章でも取り上げた当時の児童観の変化や、児童文化の育成に向かれた動きの高まりがまずは考えられ

さらに過度に着飾ることに対する知識人たちの意見の中に、当時の生活改善の動きに沿うような合理的で実用性を求めた内容もみられるようになる。大正期の記事でみられるようになるこの生活改善の動きとは、衣食住に向けられた改善運動であり、主に都市中間層にポイントが置かれた文部省を中心とした動きを指すものと考えられる。

この運動は第一次大戦後の本格的な工業化と都市人口の激増による都市居住者にみられた生活難や社会不安に対し、直接には節約や副業などによる対応ながら国家の統治機構の再編、国民統合のための方策の模索にもつながるものであつた。日常生活の改善に努めることは国家の発展に寄与するものであるとし、そのために一致団結して取り組むことが求められるようになつた。⁽¹⁴⁾

大正八年（一九一九）に文部省に新しく社会教育を担当する課が設置されると、その課で食糧増殖や副業の奨励、消費節約の三つの文部省訓令が発令された。消費節約が説かれた訓令第八号で「浪費ヲ省キ節約ヲ重ンズル美風ヲ養フコトガ最モ緊要ナ事柄デアル」とする表現は、まさに七五三批判記事にみられるものである。本訓令は、「児童生徒及ビ学生ヲシテ善ク此ノ趣旨ノ在ル所ヲ会得サセ、更ニ進ンデ之ヲ社会ニ宣伝シテ其ノ実行ヲ勧メ、弘ク之ヲ国民ノ常習トスル様ニ努力シナケレバナラヌ」として児童生徒などにもその実践を勧め、習慣化に努めることを促して終わる。さらに翌年大正九年八月に生活改善に関する調査事業の一つとして「服装改善調査委員会」が立ち上がる。委員会では服装改善問題について協議を重ね、「服装改善の方針」として、児童服については「成るべく速に洋服式に改める」との方針を発表している。⁽¹⁵⁾

七五三批判記事でも七五三を祝うことが美風であるとして今後も続けていくことを求めるものの、①親本位ではなく子ども本位、②実用性の重視、③節約という観点から祝い着について再考を促す論調となつていて、具体的には、七五三の祝い着としてどうしても高価になつてしまふ着物ではなく、子どもが動きやすく経済的もある洋服をすすめる流れがみられるようになる。『読売新聞』の「コドモノシンブン」という子ども向けの記事を載せたコーナーで

は、「七五三」と題する文章で「十五ニチ ハ 七五三 ノ オイハヒビ デス 七ツ 五ツ 三ツ ノ オコサマ
タチ ガ オミヤ ヘ オマ井リ スル ノニ イヤ ニキカザル ワルイ シフクワン ガ デキテ シマヒ マ
シタ フダンギ デモ ナンデモ ケツコウ デス キカザラナイデ オマ井リ ナサイ」（大正一一年一月二二日）
としており、先の訓令を受けた形で直接子どもに生活改善を実践するよう呼びかける内容となつてゐる。

第一章で取り上げた、子どもの成長を祝うこととおしてイエの繁栄と存続を祝い願つてきた七五三は、特に大正期に入り親と子の関係を中心とした子ども本位の儀礼へと変化していった。そして児童文化を発展させようとする動きが、いつたんは華美に走るようになった七五三の祝い着を捉え直させた。この動きをさらに後押ししたのが、大正期から都市の家庭を中心にするすめられた生活改善運動であり、洋服を着て祝う七五三の形がすすめられていくようになる。

四、七五三の洋装化とその定着

第一・三章で挙げた二新聞において明治大正期に目立つてみられた七五三流行記事と七五三批判記事は、昭和に入ると急にみられなくなる。

理由としては、七五三流行記事でみられた華美とも称された豪華な着物の祝い着に代わるものとして、簡便で経済的な子ども用の洋服が盛んに着られるようになり、七五三が批判の対象ではなくなつたことが挙げられる。そしてこの動きの背景には子ども本位の児童観と共に、国家主導の生活改善の動きがあつたことは看過できない。

明治維新後今でいう新興国であった日本では、大きな社会変革が次々となされていったが、その中心となつたのは、「新中間層」といわれる人々であつた。生活改善運動の中心となつたこれらの人々は、官公吏、軍人、医師、弁護士、

管理職などの専門職あるいは官僚的組織従事者によつて構成されていた。明治維新前の華族文化の影響を受けつつも、男女平等の核家族型、実力主義型の価値観を形成させていたという。⁽¹⁷⁾

着物市場は、明治中期以前には御召などの高級市場と、一般市民が日常作業用に着る和服の市場に大きく分断されていたが、中間層の成熟によつて、この二つの市場の間に「略服」市場が出現する。現在の価格にすると一着二〇〇三〇万円前後の「おしゃれ着市場」から現在価格で一着四～五万円程度（華美ではないけれど品が良く人前でも着られるカジュアルな和服というカテゴリー）までの幅があり、その幅をもたせた層の存在により、和装は単価が下がりかつ洋装の普及浸食を受けつつも、産業全体として大きく拡大したという。⁽¹⁸⁾

このように新中間層に向けて登場した新たな着物市場は、日常着の延長に位置づけられる、日常生活に彩りを添える性格をもつたものであった。そのため非日常時の祝いごとである七五三の着物は、急発展したこの中間の略服市場に含まれるものではなかつた。変わらず高価な子どもの祝い着を準備し、華美として批判にさらされるより、生活の洋風化や生活改善を求める流れを受けて実用的で経済的な洋服を取り入れた祝いの形が目立つようなつたといえる。

例えば、新聞では大正八・九年頃より七五三用の洋服の売り出しが目立つようになる。簡便で費用も格段に安い洋服の着用率が急速に高まつた。大正一一年一二月一三日の記事（東京朝日）「生活改善が見える七五三の宮詣り 金に飽かした和服は廃つて洋服ばやりの仕度」では、洋服の子ども服はまだ見慣れぬこともあり素人目には値段がわかりにくい利点があること、値段は和服よりも大幅に安いこと、前年の二倍の売れ行きとなつていることを紹介している。また大正一四年一一月四日の記事（東京朝日）には、七五三参拝時男児が一〇人中六・七人まで洋服だと書かれている。七五三の洋装化は昭和に入つてからも進んだ。読売新聞の昭和七年一一月二〇日の記事では、一一月一五日の午前九時から午後三時まで明治神宮、神田明神、深川八幡、日枝神社に参拝した七五三の子どもの服装を調査し、和服と洋服の着用率とを比較している（図表4）。その結果、神社によつても傾向が異なるものの、全体の合計でみると、

女児は全体で和服が二五三二人、洋服が一四〇七人で和服が優勢なのに對して、男児は全体で洋服は二七八四人にして和服は五八一人となつており、大幅に洋服が優勢となつてゐる。

図表4 七五三参拝時の子どもの祝い着調査
(昭和7年11月15日読売新聞調査、数字は人数)

	女児7歳		女児3歳		男児5歳		男児3歳	
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋
明治神宮	244	238	155	253	42	502	36	303
神田明神	506	166	427	244	133	537	51	305
深川八幡	463	160	486	192	125	472	127	387
日枝神社	108	91	133	63	46	263	21	15
計	1,321	655	1,201	752	346	1,774	235	1,010

*女児の和服計2,522人、洋服計1,407人。男児の和服計581人、洋服計2,784人。

明治大正昭和における三越の呉服を中心とした変遷について、長年の勤務経験を生かして雑誌『そめとおり』(染織新報)に長期連載した山崎肇によれば、明治期三越で全盛を誇った七五三の友仙は、大正期になつてから衰退運が見えたとしている。商工省が「衛生に良いこと」「健康的であること」「活動し易い」ということで子ども服に積極的に力を入れ始め、広巾織物を奨励するようになつたという。また一方で関東大震災後に衣服生活が節約され、生活改善とともになつて着物と洋服との二重生活が不合理との論調がみられるようになり、子ども用を含む着物の売れ行きが不振となつたという。しかし、そのため七五三を祝う人が減つたという印象はなく、「子供が如何にバターとパンとチョコレートで、大きくなりましても、民族的なお祝い行事ですから、七五三の形式は、変わらないと思っています。」⁽¹⁹⁾とし、洋風化しても七五三の祝いが引き継がれるであろうとしている。

明治大正、昭和に入つてからも都市住民に向けた生活改善のほか、関東大震災、度重なる戦争によつて、洋服に傾いた衣生活は和服にもどらず、戦後の生地がない時も、古い着物はほどいて洋服につくりかえられていつたといふ。⁽²⁰⁾

五、着物への回帰と貸衣裳

冒頭で述べた筆者実施の一九四〇～五〇年代生まれの対象者への七五三インタビューで、一九七〇～八〇年代に自分の子どもの七五三を洋服で行なつたと

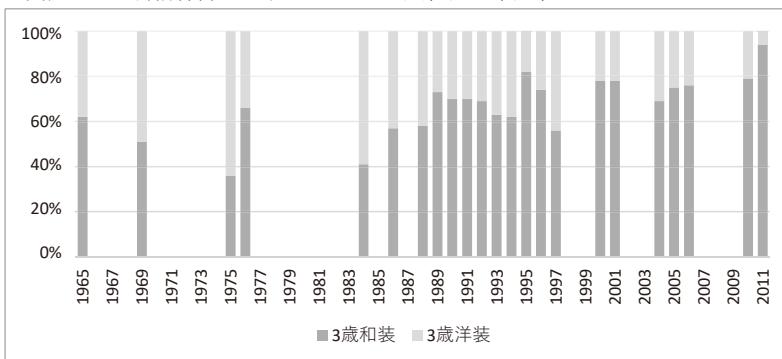
いう人がかなりみられた。これは特に男児の場合に多く、スーツなどを準備して祝つたという。女児ではワンピースを手作りしたという話も聞かれた。これに対し、二〇一〇年以降の孫の七五三では全員着物を着ての祝いだつたと回答している。

服飾専門学校の清水学園では、「七五三服装調査」(七五三の時期の日曜一日を選んで実施)として、七五三参拝者の服装を調査してきた⁽²¹⁾。明治神宮での調査結果が図表5-1、5-2、5-3である。一九六五年に和装は男児で二〇%弱、女児では六〇～七〇%台だつたのが、年毎の増減もありながら二〇〇〇年代に男児では五〇～六〇%、女児では九〇%の年も出てくるようになつた⁽²²⁾。

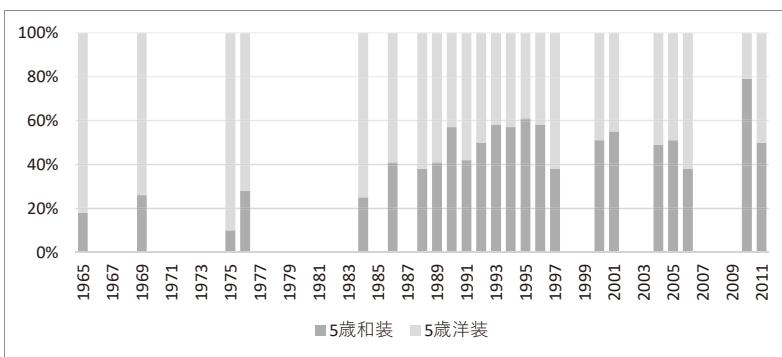
昨今七五三の着物率の上昇に最も大きく影響したのは、一九九二年からみられるようになつた着物レンタルのサービスも行なうことも写真館の存在であるのはまちがいない。しかし、図表5からわかるように一九九二年の前から、着物率はすでに上昇している。ここにはその前段階として七五三に祝い着の貸衣裳が利用され始めたことは見逃せない。本章では七五三における貸衣裳の利用の開始とその後の状況を整理する。ところで貸衣裳の動向について雑誌記事から調べると、七五三の貸衣裳に関するものは一九八〇年代になるまでみられない。まずは貸衣裳全体の動向を確認し、七五三の場合につなげることとする⁽²³⁾。

貸衣裳に関する早い時期の記事として、まず『婦女界』に一九二六年(大正十五)掲載の「貸衣裳屋から覗いた世相」は一つの目安になろう。この中で、貸衣裳業に関して古い歴史をもつものとして、神田末広町の矢沢貸衣裳店を紹介している。この記事によれば、矢沢貸衣裳店は一九一五年(大正十四)四月創業、「今から三〇年前」(記事は大正十五年)には敷金を入れて衣裳を借りる方法はあつたものの、それは貸衣裳専門ではなく、呉服店が内職的に行なつたものだつたという。まだ貸衣裳に対する意識は低く「借り衣裳をするのは、何だか恥のように思つて、どうも入りにくがられ、見てゐるところの家の前を四、五遍も行つたり来たりしてから、やつと入られるといふ風で、一度ですつと入つて来ら

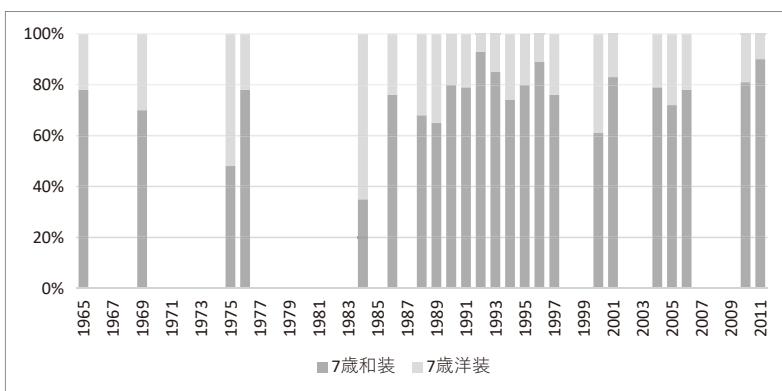
図表 5-1 明治神宮における七五三 3歳和装・洋装率(清水学園調査)



図表 5-2 明治神宮における七五三 5歳和装・洋装率(清水学園調査)



図表 5-3 明治神宮における七五三 7歳和装・洋装率(清水学園調査)



れる方は滅多にありません」と店主は語っている。同じ貸衣裳店を取材した一九三一年(昭和六)の記事では、数年間に衣裳を借りることを恥じるといったことがなくなつたとしており、急速に貸衣裳という商売が広まつた様子がうかがえる。

記事からは、長く貸衣裳は婚礼で主に利用されていたことがわかる。一九五九年(昭和三四)の『週刊明星』の記事では、都内に貸衣裳店が六〇〇～七〇〇軒があり、大手デパートでもみられることを紹介している。この時期「天皇一家の度重なる慶事」があつたことから結婚ブームであり、経費の節約という点、打掛やウエディングドレスなど豪華なことを好む風潮を反映して、「なまじ中途半端なものを作るより、かえつて貸衣裳をという考え方」が広くみられるなどを紹介している。

一九六三年の『婦人之友』にて「今日の私たちの服装生活」として、戦前には貸衣裳といえば芸能関係者や貧困の人用が多かつたが、最近は花嫁衣裳の八割くらいが貸衣裳であることを紹介している。

一九九七年(平成九)の『企業診断』「戦略診断ポイント講座 第六〇回貸衣裳業」ではこれまでの貸衣裳業界の動向と特徴を整理している。昭和三〇年代に貸衣裳業として整い始め、昭和四五年頃から高度経済成長とベビーブーム世代の結婚ラッシュの波に乗り発展、昭和五〇年代にブライダル市場が成熟期に入ったとし、この記事の頃、貸衣裳全体の売り上げの約九割が婚礼用衣裳によるものであるとする。ブライダル市場規模の今後の縮小を考えて、他の冠婚葬祭へも事業を広げていく必要性を挙げ、まずは七五三から始めて顧客の組織化をすすめることについて挙げている。そういった中で七五三に関する貸衣裳の雑誌記事については、一九八五年(昭和六〇)からようやくみられるようになる。⁽²⁴⁾ 一九八五年一一月の『主婦の友』の記事「七五三のファッショングマナー」では、レンタルした場合の費用データを掲載している。一九八七年一一月の『家庭画報』では、「七五三衣装レンタルショップ一覧」が掲載され、東京を中心とした十か所が紹介されている。一九八五年以前は、衣裳を着物にする場合、費用が高くなることやたと

え高額でもこの日のために子どもに着物を購入することを取り上げる記事が目立つ。

一九八八年の『毎日グラフ』の記事では一月六日（大安日曜）の明治神宮での七五三の様子が多く写真とともに紹介されている。記事にある祖父母を含めた家族連れ、外国人観光客の姿は今と変わらない。衣裳のレンタルについては「ブーム」としている。写真業界誌『スタジオNOW』では、一九九〇年一月号の記事で七五三の貸衣裳が広く利用されたのは、「ここ二年くらい」としている。

筆者は一九七〇～八〇年代における七五三に関する貸衣裳の状況について、関係者にインタビューをして聞いた。上野に本店を持つ大手呉服店A社のレンタルブティック関係によれば、七五三の着物に関するレンタルは、八〇年代初めにはまだまだ一般的ではなく、業界内ではまだそれほどやっているところはなかつたという。

当初は着物を借りることに対する意識が今と異なり、来店しても客は遠慮気味に「貸していただきます」という感じであつたという。先述の一般の貸衣裳が浸透する際と同じく、子どもの祝い着の場合も借りることへの抵抗感があつたのである。同じく一九六七年創業、東京・埼玉・神奈川でチャーン展開する着物のレンタル・販売会社B社の関係者も、一九七〇年代レンタル用の着物を届けにうかがうと、「家のそばに車をとめないでほしい」といわれることがよくあつたと語る。

しかし、このような借りることへの抵抗感もその後の大きな転機によって変化する。B社では一九八〇年頃から、A社では一九八五年頃から大手スーパーとタイアップをした七五三の晴着予約会を実施し、地域に入り込んで、より身近な形でレンタルを利用できるようにしていった。この時期二社の他にも、大半の着物レンタルを始めていた業者が同様のことを開始していたという。『PROFESSIONAL PHOTO』（一九八六年『スタジオNOW』と改題）では、一九七九年から一九八五年にかけてこの取り組みを行ってきたスーパー側からの記事がみられ、その中で大手スーパーの西友とダイエーの件数動向を紹介している。この二社に限らず、大手スーパーで七五三撮影を行なつていこうるは

図表6 スーパーで撮ろうとした動機は？

設問グループ	設問内容	%
宣伝	新聞の折り込みチラシを見て	16.4
	写真撮影をしているのを店頭で知って	14.8
	知人から知らされて	10.5
経験	ここで写したことがあるから	8.0
価格	写真館より安いから	10.2
便利さ	いつも当店で買い物しているから	21.0
	近いから	9.7
	この場所が便利だから	9.4

*大手某スーパーが東京2、神奈川2、千葉1、埼玉2の計7店舗で実施したアンケート。七五三撮影利用客を対象とし、326枚回収。

*『PROFESIONAL PHOTO』1986年6月号から。

ないと記している。また一九八一年九月の記事では「スーパー・マーケットで七五三を撮る、などというのは従来の常識からすると、ちょっと首をひねってしまう」という論調だったのが、一九八六年六月の記事では「今では当たり前の風景」「スーパーでの七五三撮影は、つまり市民権を得た」として、数年間に急速にスーパーでの七五三催事が人々の間で定着したことを探ることができる。⁽²⁵⁾

大手スーパーでの七五三の晴着予約会では、着物を貸すだけでなく、予約しておいた着物を七五三当日に着付けるサービス、記念写真を撮るサービスも行なっていた。後述することも写真館が実施しているサービスは、すでにこの時期に行なわれていたのである。

A社関係者は、スーパーでの予約会の実施によって、七五三が大きくクローズアップされ、レンタルすることに対する意識が変わるきっかけになったと話す。「昔前の世代では、レンタルというよりも購入する方が一般的だったので、そのようにして準備することが難しい場合、お祝いを特にしないし、洋服で簡単に済ませる方もいましたし。選択肢がないので、自然にそのようになつていったんだでしょうね」という。

図表6は大手某スーパーが実施した七五三の晴着予約会の利用者へのアンケート結果である。一九八六年に実施されたアンケート(回答者数三三六人)では、「本日当店で七五三写真を写そうとされた動機は何ですか?」という問い合わせに対し、「いつも当店で買い物をしているから」が二一%で最も多くなっている。この結果からみえることは、一九八〇年代から九〇年代にかけて、地域に入り込んで実施されたスーパーでの七五三催事が七五三にもたらした「身近さ」

「手軽さ」「便利さ」であり、その結果和装率の向上に大きく影響したといえる。遠ざかっていた七五三と着物の関係を再度つなげたのは、元々七五三とも着物とも関係がなかつたスーパーであつたことは興味深い。

六、むすびとして

以上七五三における着物の位置づけや意義について、その関係の変遷とともに論じてきた。

江戸時代末の書物に残る「髪置袴着帯解」は、明治以降に七五三という呼称で同じ内容で祝われるようになつたが、これは元々公家や武家の間で行なわれていた髪置・袴着・帯解のもつ意義が七五三に引き継がれたのではないかと考えられる。その意義とは、子どもの成長を喜び願うこと、次代を担う子どもの無事な成長を示すことでイエの繁栄や存続を確認することである。そしてその中で着物は成長・繁栄を示すための重要なシンボルであつたといえる。

明治大正期には社会の子どもに対する関心の高まりや子ども本位の児童観を背景として、大手百貨店が文化的側面と商業的側面から七五三の中の特に着物を大々的に宣伝するようになる。

しかし同時期に都市の新中間層を中心に進められた生活改善運動は、時に華美で高価な着物を子どもに着せて祝う七五三を批判するようになり、七五三を祝うことは美風で善い習慣とするものの、当時の生活の洋風化とそれを推し進める国の思惑もあり、大正、昭和と七五三を洋服で祝うことが増えていく。

七五三の洋装化の傾向は戦後も続くこととなる。この状況を変化させるきっかけとなつたのは、七五三において貸衣裳が利用されるようになつたことといえる。大正期にはすでにみられた貸衣裳は、祝い着を借りることに対する抵抗感もあり、すぐには広まらなかつた。七五三の場合もはじめは同様であつたが、人々の生活の中に入り込んでいたスーパーが仲介役となる形で、着物レンタルや写真撮影を行なう七五三の晴着予約会が大当たりすることとなつた。

スーパーのもつ「身近さ」「気軽さ」「便利さ」が人々と七五三の着物を再度取り持つ役割を果たしたといえる。

華美で高価であることから、一時は七五三の中心的な位置からははずれた着物であったが、その着物が貸衣裳を通じて便利で気軽といったイメージで再度広く利用されるようになつたことは興味深い。

本論では着物を切り口に七五三の捉え直しを試みたが、その結果「子どもの成長を祝う」ことを軸にしながら、その日々の状況に応じ、イエの繁栄や存続の確認という意義、子どもの健全な育成のための教育的・社会的意義がみられ、さらには伝統とつながることを希求する文化的意義といった意義への変化がみられる。現在着物との関連でみると、つながりを求める文化的意義が儀礼サービスを利用する直接あるいは間接的な理由となつている感がある。

現在の親たちに七五三の祝いをした理由について聞くと、「神社・寺で子どもの健やかな成長、将来の幸せを願い、神や仮のご加護を得たかったから」「子どもの成長の一歩階の記念として思い出作りをしたかったから」という選択肢が多く選ばれる中、「せつかくの機会なので、子どもに着物を着せてあげたかったから」ということを挙げる人もみられた。²⁶⁾七五三を着物で祝うことを通じて、文化的体験をさせてあげたいということであろう。それは自分が生まれ育った社会、そしてその過去や未来とつながろうとする行為であるといえる。

しかし普段は自分で着ることもまわりで着ている人を見ることもなくなる中、七五三で着物を着ることの中に現在の生活との接点が見つからず、自文化体験になるはずが異文化体験となつている様子が見受けられる。文化的意義を求めるならば、儀礼サービスを利用する側は着物を着ることについて普段の生活とのつながりを模索すること、提供する側は文化とつながるための提供方法や内容の模索が今後必要となつてくると考えられる。

これまでにも変化し続けてきたように、七五三の祝い方は今後も変化し続けると考えられる。しかし一方で、長く成長を祝うことが儀礼の中核にあり続けたことから、これからもその部分は維持されるのではないだろうか。着物は古くは子どもの成長を象徴するものとなつていたことからこの儀礼の重要な要素となつていたが、人々は着物に対する

知識をもたなくなり、着物は成長とはつながりにくくなっている。現在七五三の重要な要素である写真が、子どもの成長を記録や記念に残すようになってきたことと比べると対照的である。

今回の試論で新たに見出した課題に取り組みながら、今後も七五三における着物の位置づけや意義について、その動向に注視していきたいと考えている。

註

- (1) 子どもの写真に特化した写真館で、多数の貸衣裳を取り揃えてヘアメークも行ない、撮影後すぐに写真を確認し必要なものの購入してもらうというシステムをもつ。一九九二年にスタジオアリスによつてはじめられたのち、同じ形で営業する写真館が増えた。
- (2) 田口祐子「祖母・母親・子の立場で経験した七五三に関する祝い方と意義の変遷に関する調査」（冠婚葬祭総合研究所 令和三年六月号メールマガジン『GHK Bulletin』一五〇号）では、二〇一九年時点までの結果をもとに集計している。
- (3) 前掲(2)でのインタビューデータをテキストマイニングのフリーソフトウェア KH Coder にかけた結果得られた重要なキーワードがこの四つであった。「お祝い」は人の集まることに関連したキーワード。
- (4) 新谷尚紀監修『家庭で楽しむ「子どものお祝い」と季節の行事』日本文芸社、二〇一二年。引用は五四頁。
- (5) 筆者は別論(田口祐子「江戸時代以降の髪置・袴着・帯解に関する一考察——七五三の形成を考える——」『儀礼文化学会紀要』第六号、二〇一八年、一二四～一四六頁)で、江戸の町でこれら三つの儀礼が「髪置袴着帯解」としてひとまとめて合体化、祝いの内容も簡略化されていく中で、各儀礼の内容を意味する呼称が重要でなくなり、その結果取り去られ、実施する年齢の目安となる七・五・三を並べて呼ぶ形である七五三に変わつていつたと考えられるとした。
- (6) 河鰐美英編『日本服飾史辞典』(東京出版、一九六九年)三七～三九、一〇五～一〇八頁参照。現在の形の着物は初め小袖とよばれ、平安時代は公家の下着であったといふ。
- (7) 恩賜財团母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』(第一法規、一九七五年)は、章立てを「紐解き祝いと袴着」と「氏子入り」に分けており、前者に三歳や五歳のカミオキとハカマギ等が、七歳以降のオビトキやヒモトキは主に後者に入つてゐる。本書ではオビトキとヒモトキのうちヒモトキが多いが、『東京の民俗』ではヒモトキはほとんどみられずオビトキ

のみとなつてゐる。

- (8) 竹内利美「七五三祝いと子ども組」『講座 日本の民俗宗教一 神道民俗学』弘文堂、一九七四年、二九四～三〇八頁。
竹内は七五三が幼児期の人生儀礼の合体化・簡略化したものと位置付けている。
- (9) 東京都教育委員会『東京の民俗』(全八巻、昭和五九～平成四年)にその結果がまとめられている。
- (10) 田口祐子「現代における人生儀礼の地域性とその変遷——茨城県の七五三とホテル・旅館に関する調査を中心にして」『國學院大學大学院紀要——文学研究科——』第四八輯、二〇一七年二月、四三～六〇頁。七五三披露宴とは儀礼産業の提供するサービスの利用が進む中、結婚披露宴に例えられるような盛大な形で七五三が祝われるようになつたものをさす。現在も少ないが行われることがある。
- (11) 田口祐子「明治大正期の七五三に関する一考察」『女性と経験』四一号、二〇一八年一〇月、九五～一〇四頁。
- (12) 神野由紀「百貨店の子供用商品開発——三越・服店を例に」(山本武利ほか『百貨店の文化史——日本の消費革命』世界思想社、一九九九年)一七八～一九六頁。引用は一七八頁。
- (13) 是澤優子「明治期における児童博覧会について(一)」『東京家政大学研究紀要』第三五集(一)、一九九五年、一五九～一六五頁、同『明治期における児童博覧会について(二)』『東京家政大学研究紀要』第三七集(一)、一九九七年、一二九～一三七頁、同『大正期における三越児童博覧会の展開』『東京家政大学博物館紀要』第一三集、二〇〇八年、三九～四六頁参考照。引用は、一九九七年の一二九頁。
- (14) 中島邦「大正期における「生活改善運動」(『日本女性史論集六 女性の暮らしと労働』吉川弘文館、一九九八年二三〇～二六二頁)岩本通弥「家族をめぐる二つの生活改善運動——民力涵養運動と新生活運動」(田中宣一編『暮らしの革命 戰後農村の生活改善事業と新生活運動』農山漁村文化協会、二〇一一年)九一～一八頁。
- (15) 学制百年史編集委員会「日常生活上浪費ヲ省キ節約重ンズルノ良習養成ノ件(大正八年八月十九日文部省訓令第八号)」文部科学省HP。
- (16) 難波知子「生活改善運動——文部省主催の各種展覧会と生活改善同盟会の結成」『学校制服の歴史 徒服装の変遷』創元社、二〇一二年、二二〇～二三四頁。
- (17) 前掲註(14)参照。
- (18) 鶩田祐一「消費市場の発達と技術・価格・デザイン」(一五三～一六五頁)、藤岡里圭・二宮麻里「着物の流行と百貨店

の役割」（一六七）一八八頁）、吉田満梨「戦後～現代のものづくりと市場創造に流通事業者が果たした役割」（一八九）二〇七頁）。いずれも島田昌和編著『きものとデザイン』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）から。

（19） 山崎肇「近代呉服の歩み（四六）七五三友仙の近代史」『そめとおり』二〇四号、一九六七年、六二～六七頁。

（20） 増田美子監修『ビジュアル日本の服装の歴史③明治時代～現代』ゆまに書房、二〇一八年、四四頁参照。

（21） 一九一六年日本初の服飾学校として岐阜県大垣市に設立された。「七五三服装調査」は一時中断をはさみ、戦前から七五三の時期に実施されてきた。明治神宮を主要な調査地とし、年によって各地の社寺でも実施されてきた。

（22） 内田直子は一九九〇～二〇〇二年にかけて都内一社での七五三着装状況について調査している〔七五三行事にみる家族衣風景の変遷・一九九〇～二〇〇二年について〕『夙川学院短期大学研究紀要』三八巻、一〇〇九年、五一～五八頁）。この一二年の間女子三歳と七歳は各年八〇～九〇%と高いのに対し、男子は五四・八%が七一・八%と一〇年余りで一七%も和装化が進んだことを報告しており、清水学園と類似した結果となっている。

（23） 田口祐子「七五三と貸衣裳：紙媒体から動向と意識の整理を試みる」冠婚葬祭総合研究所『論文集・冠婚編・葬祭編』二〇二一年度、一六〇～一七七頁。貸衣裳に関する雑誌記事検索は、国立国会図書館リサーチを利用し、「貸衣裳」「貸衣装」を検索ワードとした。

（24） 田口祐子「キッズビジネス」と七五三「女性と経験」四二号、一六〇三二頁。雑誌記事は一九八七年以前は『大宅社

一文庫雑誌記事索引総目録』一九八八年以降は大宅社一文庫WEB検索を利用して、件名「七五三」で検索し、収集した。

（25） 田口祐子「七五三の全国的な広がりとスープーの役割」『開智国際大学紀要』第一八号、二〇一九年、八七～九八頁。

（26） 田口祐子「現代の七五三に関する実態調査」『現代の産育儀礼と厄年観』岩田書院、二〇一五年、一九九〇～二一九頁。本調査は二〇一一年に東京足立区で小学生までの子どもを持つ親一七二人に実施した。取り上げた設問は「七五三のお祝いをした理由を教えてください」として選択肢の中から一番目と二番目を選択してもらう形をとった。

（一般財団法人 冠婚葬祭文化振興財団 冠婚葬祭総合研究所研究員）